

特別支援学校中学部での授業「見つけた考えた」

—その 6 自信のなさが目立つ生徒に対する授業における取り組み—

○藤島美乃里

慶野直美

菊池けい子

（旭出学園（特別支援学校）） （旭出学園（特別支援学校）） （旭出学園教育研究所）

KEY WORDS: 知的障がい 授業分析

【目的】

本校中学部「見つけた考えた」は、生徒 1 名が発表者となり、進行役の教員（以下 MT）とともに学校や家で興味を持った事物について、実物を見せながら紹介する授業である。その他聞き手の生徒らは、サブティーチャー（以下 ST）と呼ばれる教員とともに、発表物についての感想などを発表する（齋藤、2020）。そして学期末には、授業評価として期末テストを実施している。

今回対象にした生徒は、ST である筆者が質問することには答えても、終了後、同じ質問をすると「分からない」と答えることが多かった。その「分からない」をどうにかしたいという思いから、筆者は学期末の評価を基に、ST として関わりを見直し、ワークシートを導入することにした。ここでは、その取り組みを報告して考察する。

【方法】

1. 対象生徒 A（以下 A）の概要

中 2 男子、知的障害

A は小学部 3 年から本校に在籍している。編入する前は、地元の小学校の通常学級に通っていた。中学部入学当初は、自分の考えをまとめたり、時系列で物事を捉えたりすることが苦手で、会話の中でズレや矛盾が生じることもあったが、中 2 時では、教員や友だちと関わることやコミュニケーションが増えたことで、会話が成立することが多くなった。認知面は、田中ビネー知能検査 V にて 13 歳 8 か月時、精神年齢(MA)は 3 歳 8 か月。学習面では、文字の読み書きに関して、ひらがな・カタカナを読むことはできるが、漢字は難しい。ひらがな・カタカナ 50 音は書けるが、促音、拗音は苦手である。

2. 指導期間 20XX 年 6 月～20XX 年+1 年 3 月

3. 授業中（6～12 月）の様子と学期末（12 月）の評価

A は、発表物に自ら興味を示すことが余りなく、ST の促しがあれば、発表物に注目することができた。また、MT が生徒全体に向けて質問して、A を指名すると、A は何に対して質問されたのかが分からず、「分からない」と答えたり、ST に助けを求めることが見られた。

授業中、ST は発表物への注目を促したり、関心を持てるように働きかけるなど、口頭でのやり取りで指導を行った。学期末（12 月）のテストでは、植物の体の部位（根、茎、葉、花、種、実）を書く問題（その 5、写真②参照）は概ね答えられていたが、部位を問う問題（その 5、写真③参照）は 7 問中 3 問正答という結果だった。テスト時、A は教員からの促しがなく問題に答えようとしない、問題の意図が理解できずに解答欄に何を書けばよいかわからない様子が見られた。授業中の様子並びに学期末の評価から、A が自ら積極的に授業に参加できるようになることを指導目標として、口頭でのやり取りに加えて、ワークシート（以下 WS）を導入した指導を行うことにした。

4. その後の授業（1～3 月）での取り組み

1～3 月の授業では、WS（図 I）を導入した。WS は、①植物の体の部位を書く、②誰が、何を発表し、その発表物を見て気付いたこと（色、大きさ、感触、匂いなど）を書くという内容である。

(1) WS の導入

毎回、授業前に①を記入し、確認できた上で参加できるようにした。また、授業が始まったら、発表物を見る度に②を記入するよう、促した。

(2) WS に取り組む中で行ったやり取りの記録

授業の様子から自分の回答に自信が持てないのは、間違えることが嫌、「違う」と言われるのが怖いことが背景にあると考え、ST（筆者）は授業中、A の発言が間違っているも直さずにそのまま聞くようにした。そして、その時に ST がどのような発問をし、どのようなヒントやアドバイスを A が答えたかを毎回 A とのやり取りを振り返って記録するようにした。

（図 I）使用したワークシート（WS）



【倫理的配慮】

発表にあたり学校長、保護者の承認を得た。

【結果】

1. 授業中（1～3 月）の A の様子

WS に対し、A は抵抗なく毎回取り組むことができた。気付いたことを文字に書き記すことで、可視化され、それをヒントに発言することが増え、MT の質問に対しても、WSを見ながらスムーズに答えられるようになった。また、「（プリントに記入する欄を指しながら）これ何？」と自分から ST に質問できるようになり、自分から「ざらざらだね」など以前は答えなかった感触のことまで言えるようになった。「分からない」と答えることも減少した。

2. 学期末（3 月）の評価

3 月に行ったテストでは、12 月同様、植物の体の部位は概ね答えられており、部位を問う問題は、6 問全問正解だった。出題の仕方（その 5、写真④参照）は多少変わったものの正答率 42%から 100%になった。また、前回に比べ、A は ST の促しがなくても自分から問題に取り組むようになり、問題を解いている時間が短縮した。

【考察】

授業中の様子並びに 3 学期末のテストの結果から、A の実態に即した WS を導入して指導を行ったことで、A はみんなの前で自信を持って発言することが増えたのではないと思われる。また、主体的な学びが求められる本授業で、A の発言に共感的な理解を示すことは、授業参加を促す ST の役割として大事であると思われた。

(FUJISHIMA Minori, KEINO Naomi, KIKUCHI Keiko)